

片山タイムズ

十三号
令和五年
七月吉日

茶銘と誌

お稽古では問答の練習で、茶杓の銘をその時のものを答えたり、濃茶のお稽古では、茶銘や詰めを問答しています。

そのなかで生徒さんの中で、『茶銘ってそもそも何』という質問と、『どんな茶銘と詰めがあるのか』という質問がありましたのでお答えします。

『茶銘ってそもそも何』

簡単にいうと抹茶につけられた名前になります。はじまりは室町時代中期に茶葉に等級によって区別をしたことにより。一番上級なものを濃茶に使用し他は薄茶用に使用されたようです。これらにそれぞれ名前がつけられていたようです。その後村田珠光(じゅこう)の弟子が茶会をしたときに銘を尋ねられ答えたのが茶銘の原初の姿のようです。

江戸時代に入ると、宇治茶では「白」や「昔」の名が使われるようになります。

白は新茶を蒸して製茶すると白くなるところから名づけられた銘。

昔は二十一日を意味する合わせ字で(廿一日を詰めた字)、旧暦三月二十一日に茶の葉を摘み始めたことからか、春分の日から二十一日目に摘んだ葉であるからとか、いろいろな伝えがあります。

その後、茶銘は茶会に一つの景色を添えるものとなり、大名や僧侶、茶道家などがそれぞれ自由な銘をつけることが多くなりました。

現代では、茶商の商標として、各流派の各宗匠の好みによって種々の茶銘がつけられています。ちなみ茶の詰めは茶葉を茶籠(現在なら袋とか缶ですかね)に詰めて茶籠になります。非常に重要な役割だから茶席での末客を詰めとよんだという説や、末客にその席で使うお茶屋さん

が座ることから詰めという説もあります。下段ではさまざまなお詰めと茶銘を紹介します。



上林春松本店

江戸時代は、「御物茶師」(ごもつちやし)として宇治を仕切っていました。今は綾鷹でおなじみですね。

坐忘齋宗匠御好

嘉辰の昔(かしんのむかし)
緑毛の昔(りよくもうのむかし)
鵬雲齋大宗匠御好
翔雲(しょううん)
祥宝(しょうほう)



丸久小山園

現在の社長さんは、茶道裏千家淡交会青年部近畿第一のブロック長をされています。

坐忘齋宗匠御好

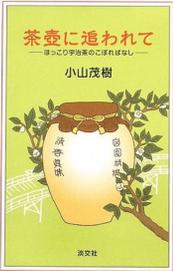
松花の昔(しょうかのむかし)
慶知の昔(けいちのむかし)
鵬雲齋大宗匠御好
松雲の昔(しょううんのむかし)
喜雲(きうん)

山政小山園

静岡でも以前顧問の小山茂樹さんに講演してもらっています。茶壺に追われてという本もだしています。写真はその時の様子です。

坐忘齋宗匠御好

千里の昔(せんりのむかし)
鵬雲齋大宗匠御好
葉室の昔(はむろのむかし)



福寿園

伊右衛門でおなじみですね。現在の社長は茶道裏千家淡交会青年部全国委員長です。

坐忘齋宗匠御好

瑞縁(ずいえん)
萬丈の昔(ばんじょうのむかし)
鵬雲齋大宗匠御好
平安の昔(へいあんのむかし)
閑松の昔(かんしょうのむかし)
古今の昔(ここんのむかし)
都の昔(みやこのむかし)



竹茗堂

静岡の名門の茶舗です。ウス茶糖が有名です。

淡々齋宗匠御好

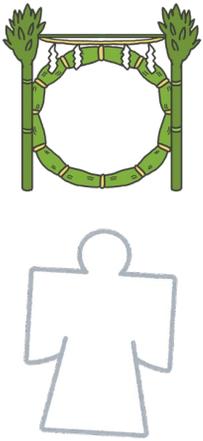
駿河舞(するがまい)
鵬雲齋宗匠御好
鳳静の昔(ほうせいのみかし)
坐忘齋宗匠御好
山雲の昔(さんうんのむかし)

他にも様々な、お茶屋さんで好みがあります。また今回は濃茶のみの掲載ですが、お薄も様々なお好みがあります。

夏越の祓

「夏越の祓」とは、六月末に行う祓の行事で、神社の境内につくられた茅の輪をくぐって罪や穢れを落とすため、「茅の輪くぐり」とも呼ばれています。茅の輪とは、茅(ちがや)という草で編んだ輪のことです。

日々生活していると、さまざまな罪や穢れが生じると考えられてきました。そこで、茅の輪や形代(かたしろ)などで行うように罪や穢れを祓(おはらえ)るもの「夏越の祓(夏越大祓)」で、十二月末に行うものを「年越の祓(年越大祓)」といいます。



お茶の都ミュージアム

静岡県島田市にあるお茶に特化した美術館です。茶摘み体験・手もみ体験・抹茶挽き体験・茶道体験やお茶の産産、歴史、文化、機能性の展示のほか、日本庭園や小堀遠州の綺麗さびなど、お茶のイベントを行ったり、館内はお茶の作り方や、世界のお茶に関する情報がわかるようになっています。

茶道体験は、裏千家の島田の先生が中心に担当しています。当社で独立されました児玉先生が、毎月茶席を持っています。また、当社中の石田さんや増田さんがお手伝いをしています。次は七月二十一日に担当されます。お時間がありませんでしたら是非お出かけください。



名物裂

社中の伊久美さんからの質問がありました。「名物裂って茶道だけにつかうのですか」

まずは名物裂は、室町時代を中心に鎌倉時代から江戸時代初頭にかけて舶載された染織品で、大名家や社寺などに所蔵された裂のことです。当時はお仕覆やお軸など、茶道具関係で輸入されたように思われます。

名物裂として明確に規定したのは、寛政三年(1791年)として上梓された、松平不昧の『古今名物類聚』名物裂の部二冊といわれています。166裂の名物裂を彩色によって図示されています。たくさんあってこそ覚えさせたいですね。あとはよく勘違いするのが正倉院におきましているものは、正倉院裂(天平裂)となります。

現在は帯や、財布、ガマ口、特殊なものでは筒の袋やおりの座布団などいろいろな名物裂は使われていますが茶道具が一番多いのではないのでしょうか。